猩紅熱ト「デフテリー」トノ 關係ニ就テノ考察

Dr. Hideo Morihana: Betrachtungen über die Verhältnisse
zwischen Scharlach und Diphtherie.

長野縣大町町立病院耳鼻咽喉科

醫學士 森 鼻 英 雄
モリ ハナ ヒデ オ

(本論文ノ要旨ハ大日本耳鼻咽喉科會名古屋地方會)
(第五十七回例會席上ニ於テ演説セリ。)

内 容 目 次

第一章 緒 言	第一節 猩紅熱ト「デフテリー」トノ發生 的關係ニ就テ
第二章 統 計	第二節 猩紅熱ノ死因ニ就テ
第一節 年度別統計	第三節 猩紅熱併發「デフテリー」ノ豫後 ニ就テ
第二節 季節的關係	第四章 結 論
第三節 血清注射量ニ就テ	主要文獻
第四節 豫後ニ就テ	
第三章 考 案	

第 一 章

緒 言

從來猩紅熱性「デフテリー」(Scharlachdiphtherie)ト稱セラル、モノハ二様ニ解釋スル事ヲ得。其一ハ「フレグモーネ」性「アンギーナ」ニシテ、Jochmann ノ云ヘル Angina necroticans 又ハ Streptokokkenangina トモ稱ス可キモノナリ。而シテ此病變ハ明カニ連鎖狀球菌ニ因ルモノニシテ「デフテリー」菌ハナク。「デフテリー」トハ全く無關係ナリ、之ニ反シ明カニ「デフテリー」菌ノ證明サル、場合、即チ猩紅熱併發「デフテリー」ト稱ス可キ場合モ稀ニ遭遇スル所ニシテ嚴密ニハ Scharlachdi-

phtherie トハ異ナルモ、其經過、豫後等ニ關シテハ單獨ニ發生セル「デフテリー」ト多少趣ヲ異ニスル所アリ。余ハ大町病院最近5ケ年間ニ取扱ヒタル猩紅熱、「デフテリー」及ビ猩紅熱併發「デフテリー」患者ニ關シテ少シク觀察シ、猩紅熱、「デフテリー」間ニ於ケル關係ニ就キ考察セリ。症例少キヲ遺憾トスルモ多少ナリトモ兩者間ノ關係考察ニ資スル所アラバ余ノ幸、之ニ過グルモノナカラン。

第 二 章

統 計

第一節 年度別統計

年度別統計ニ關シテハ第1表ニ示スガ如シ。

即チ、大町地方ニ於テハ猩紅熱及ビ「デフテリー」ハ昭和 12 年ニ非常ナル流行ヲ來タシ、例年ニ比較シテ多數ノ患者ノ發生ヲ見タリ。從ツテ猩紅熱併發「デフテリー」患者モ亦同年ニ於テ多數ニ發生セリ。

第 1 表

	猩 紅 熱	「デフテ リー」	併發「デフ テリー」
8 年	5	2	0
9 年	17	12	1
10 年	11	5	1
11 年	23	8	0
12 年	83	29	9

第二節 季節的關係

第 2 表ニ於テ明カナル如ク猩紅熱患者ハ 2 月、3 月ニ最モ多ク、4、5、7、9 月之ニ次イデ稍々多キニ反シ、「デフテリー」患者ハ 12 月ニ最大多數ヲ示シ 11 月之ニ次グ。然ルニ猩紅

第 2 表

	猩 紅 熱	「デフテ リー」	併發「デフ テリー」
1 月	10	2	0
2 月	20	6	1
3 月	21	4	1
4 月	16	2	0
5 月	13	3	2
6 月	7	4	0
7 月	14	3	0
8 月	3	3	0
9 月	13	5	4
10 月	10	5	3
11 月	9	8	0
12 月	3	11	0

熱併發「デフテリー」患者ニ於テハ合計 11 名ニシテ之等ハ孰レモ 2、3、5、9、10 月ニ發生シ、然モ比較的多數ニ發生セル 9、10 月ハ猩紅熱及ビ「デフテリー」ニ於テハ其發生比較的少キヲ見ル。即チ、季節的ニハ之等三者ノ間ニ特ニ一致ス可キ點ヲ認メズ。從ツテ季節的ニハ何等關係ナキモノ、如シ。

第三節 血清注射量ニ就テ

單獨「デフテリー」患者及ビ猩紅熱併發「デフテリー」患者ニ於ケル血清注射量ニ關シテハ症狀ノ輕重ニヨリテ異ルモ、最高 18000 單位、最低 3000 單位ニシテ、單獨、併發兩種患者ノ間ニ於テ血清注射量ニ關シテ著シキ差異ヲ認メズ。即チ、血清注射量決定ニ際シテハ、猩紅熱併發「デフテリー」患者ニ於テモ合併症ノ有無ハ殆ンド考慮セズ、專ラ「デフテリー」症狀ノ輕重ニ從ヒテ決定セラレタルモノ、如シ。從ツテ血清注射量ニ關シテハ單獨「デフテリー」患者、猩紅熱併發「デフテリー」患者兩者共、經過、豫後等ヲ考察スルニ當リ全ク同一條件ニアリト思考セラル。

第四節 豫後ニ就テ

余ハ單獨「デフテリー」患者及ビ猩紅熱併發「デフテリー」患者ノ豫後ヲ血清注射ヨリ偽膜除去迄ノ日數、治癒迄ノ日數及ビ死亡率ノ三者ニ就キ觀察セリ。即チ、第 3 表ニ依リテ明瞭ナル如ク、前二者ニ就キテノ平均日數ハ猩紅熱併發「デフテリー」ハ單獨「デフテリー」ニ比シ

第 3 表

	血清注射ヨリ 偽膜除去迄ノ 平均日數	「デフテリ ー」治癒迄 ノ平均日數	死亡率
單 獨 「デフテ リー」	4 日	12 日	17.8%
併 發 「デフテ リー」	10 日	17 日	45.5%

テ遙カニ日數ヲ要シ、又死亡率＝關シテハ猩紅熱併發「デフテリー」ハ單獨「デフテリー」ヨリモ著シク高度ナリ。即チ、猩紅熱併發「デフテリー」ノ豫後ハ單獨「デフテリー」ノ夫レヨリモ不良ナリト云フヲ得ベシ。

第三章

考 案

第一節 猩紅熱ト「デフテリー」

トノ發生的關係ニ就テ

大町病院最近5箇年間ニ取扱ヒタル猩紅熱併發「デフテリー」患者ハ合計11名ニシテ中、氣管切開ヲ行ヒタル者1名、合併症トシテ中耳炎ヲ併發セン者2名アリ。而シテ之等患者ハ孰レモ數日前ヨリ高熱アリシ處。最近ニ至リテ咽頭痛、呼吸困難等ノ症狀現ハレタル爲メ來訪セン者ニシテ、初診ニ於テ猩紅熱、「デフテリー」共ニ發見セラレタル者、或ハ既ニ猩紅熱ニテ入院加療中ニ之等「デフテリー」症狀ヲ發現セル者ナリ。而シテ「デフテリー」症狀ノ發現當時ハ全身のニモ高熱、皮膚發疹著明ニシテ、舌亦典型的猩紅熱ノ兆ヲ呈シ猩紅熱ノ極盛期ニアルモノト想像セラレタリ。即チ、「デフテリー」症狀ハ猩紅熱ノ極盛期ニ於テ發現セルモノナルベシ。

由來、健康扁桃腺内ハ種々ナル細菌ノ生存セル所ニシテ、「デフテリー」菌ノ存在モ亦想像セラル、所ナリ。Koberハ600名中15名ニ、Davisハ113名中2名ニ於テ「デフテリー」菌ヲ證明シ、Julianelleハ4%ニ於テ之ヲ證明セリト報告セリ。我國ニ於テハ如何ナル率ニ該菌ヲ證明スルヤ、余ハ募捐ニシテ之ヲ知ラザルモ山本氏モ「デフテリー」菌ハ扁桃腺、殊ニ口蓋扁桃腺

ヤ咽頭扁桃腺ノ腺窩中ニ於テ健康體ト雖モ之ヲ證明スル事ガ出來ルト記載セラレタル如ク、我國ニ於テモ該菌ハ可成リ高度ニ證明サルハニ非ズヤト想像サル。然ラバ斯カル「デフテリー」菌保菌者ガ猩紅熱ニ罹患セル場合、何等カノ關係ニ依リテ健康扁桃腺内ニ生存セル「デフテリー」菌ガ活動性ヲ現ハシ、爲ニ「デフテリー」症狀ヲ惹起スルニ非ズヤト想像スルハ、前述ノ猩紅熱併發「デフテリー」ガ孰レモ猩紅熱ノ極盛期ニ於テ發現セル事實ト綜合シテ恐ラク可能ナリト信ズ。

第二節 猩紅熱ノ死因ニ就テ

一般ニ猩紅熱ハ普通型ト惡性型トニ區別セラル、モ、村山氏ニ依レバ後者ハ更ニ中毒型（電撃性）ト腐敗型（敗血性）トニ區別セラル。而シテ猩紅熱ノ死亡率ニ關シテハ現在輕症ノモノ多ク1—2%トセラル。昭和12年村山氏ノ統計ニヨレバ猩紅熱患者2096名中、死亡例ハ41名ニシテ特ニ2歳、3歳ノ幼兒ニ多シト、本病ノ死因ハ流行ノ性質ニヨリ變動シ得ルコト勿論ナルモ、大部分ハ前述ノ惡性型、若シクハ重篤ナル合併症ヲ併發セルモノニシテ、之ヲ村山氏ノ統計ニ依レバ次ノ如シ。

肺 炎	10 名
惡 性 型	8 名
兼「デフテリー」	8 名
腎炎尿毒症	5 名
產褥性猩紅熱	5 名
頸部蜂窠織炎	4 名
脚氣衝心	2 名
膿 胸	1 名
結核性腦膜炎	1 名
猩紅熱性腦膜炎	1 名

全身衰弱

1 名

次ニ余ノ調査セシ所ニ依レバ猩紅熱患者 150 名中、死亡例ハ 10 名アリ。而シテ其死因ヲ列擧セバ次ノ如シ。

「デフテリー」

5 名

敗血症

1 名

腎炎尿毒症

1 名

壊疽性「アンギーナ」

1 名

膿胸

1 名

不詳

1 名

以上ノ中、敗血症及ビ壊疽性「アンギーナ」ノ各 1 例ハ前述ノ悪性型ノ中ノ腐敗型ニ該當スルモノナリ。

以上、村山氏及ビ余ノ統計ニ就キテ考察スルニ「デフテリー」ハ肺炎ト共ニ猩紅熱ノ死因ノ大部分ヲ占ムルモノニシテ。猩紅熱兼「デフテリー」ハ意外ニ死因トシテ重要性ヲ占ムト云ハレタル村山氏ノ意見ニ余モ亦同感ナリ。此事實ハ猩紅熱ト「デフテリー」トノ併存ガ意外ニ多キ點ト共ニ猩紅熱「アンギーナ」ノ場合ニ於ケル「デフテリー」菌檢索ノ必要ヲ益々大ナラシムルモノニ他ナラズ。

第三節 猩紅熱併發「デフテリー」

ノ豫後ニ就テ

猩紅發併發「デフテリー」ノ豫後ハ既ニ述ベタル如ク單獨ニ發生セル「デフテリー」ニ比シ甚ダシク不良ナリ。而シテ其不良ナル所以ハ現在之ヲ察知シ得ル由ナキモ、Scharlachvirus ト「デフテリー」菌トノ間ニ或ル作用ガ働キテ爲メニ「デフテリー」菌ガ「デフテリー」抗毒血清ニ對スル抵抗力ヲ増加スル爲メトモ想像シ得ラルハナリ。然レ共、Scharlachvirus ノ本態ニ關シテハ現在尙ホ不明ナリ。Balginski u.

Sommerfeld, Stavens a. Dochez, 紋谷氏等ノ報告ニ依レバ猩紅熱「アンギーナ」ノ扁桃腺ヨリ殆ンド 100% ニ溶血性連鎖狀球菌ガ證明サルル事實ハ該菌ガ猩紅熱ト何等カノ關係アルガ如キモ、此 Scharlachstreptokokken ノ特異性ニ關シテハ今尙ホ斷定ヲ下ス能ハズ。

1937 年 Johannes Schubel ハ猩紅熱「アンギーナ」ニ於テ摘出セル扁桃腺ノ腺窩ハ勿論、實質内ニ更ニ時トシテハ胚芽中樞組織内ニモ連鎖狀球菌ノ集團ヲ認メ、且ツ此扁桃腺ヲ行フ事ガ猩紅熱ノ二次的疾患トシテノ腎臓、心臟、或ハ「ロイマチス」性疾患ノ根治療法トシテモ役立つ事實ヨリ、此連鎖狀球菌ハ少クトモ Scharlachvirus ト密接ナル關係アリト云ヘリ。然レ共此連鎖狀球菌ノ特異性ノ不明ナル今日、彼ノ説ニモ直チニ肯定シ難ク、且ツ又該菌ヲ以テ猩紅熱ノ病原菌ト看做ス事ハ勿論不可能ナリ。

Joehmann ハ猩紅熱ノ屍體ノ $\frac{3}{4}$ ニ於テ血液中ニ連鎖狀球菌ヲ認メ、且ツ扁桃腺ヲ始メ皮膚ノ剝落物中ニモ同菌ノ存在ヲ證明セリ。更ニ又、彼ハ猩紅熱患者 23 例中、發疹期ノ第 1 日、第 2 日目ニハ血液中ニ同菌ヲ見ズ、其後半期ニ最モ屢々同菌ヲ發見スト報告セリ。即チ、此連鎖狀球菌ハ第二次的感染ノ如ク想像サレ、少クトモ猩紅熱ニハ最初眞ノ病原菌ニアリテ、次ニ連鎖狀球菌ガ之ニ代ルモノト見ラルベシ。健康扁桃腺内ハ種々ナル細菌ノ常住スル所ニシテ之等細菌ニ關シテハ既ニ多數ノ諸家ノ報告アリ。我國ニ於テモ富田氏ハ扁桃腺内ニ於ケル細菌ニ就キテ研究シ、双球菌 92%、葡萄狀球菌 87%、連鎖狀球菌 72% ノ多數ニ認メ、之等 3 種ハ殆ンド扁桃腺ニ於ケル常住菌ト看做シ得ベシト云ハレタリ。健康扁桃腺内ニ於ケル溶血性

連鎖狀球菌＝關シテハ、之ヲ諸家ノ報告ニ見ルニ

Smillie	50.0%
Pilot a. Davis	58.0%
伊 藤	41.0%
弘 中	44.8%

ニシテ、殆ンド半数ニ於テ陽性ナリ。健康扁桃腺内ニ於テサヘ溶血性連鎖狀球菌ガ斯ク多數ニ認メラル、モノナレバ、假令單純性ト雖モ、Angina lacunarisノ扁桃腺内ニ於テハ如何ニ多數ノ溶血性連鎖狀球菌ガ認メラル、カハ容易ニ想像セラルベシ。

元來猩紅熱ハ必ズシモ其定型的症狀タル扁桃腺炎、覆盆子舌、特有ノ血液像、皮膚發疹、皮膚落屑、Rumpel-Leede氏症狀等ヲ呈スルトハ限ラズ之等症狀ノ中、其多數ヲ缺如スルコトアリテ、我國ニ於テモ特ニ之等ノ輕症猩紅熱ニ關シ村山、埴、久保、遠藤氏等ノ報告アリ。而シテ斯カル輕症猩紅熱ノ存在スル事實ヨリ Fein, Lexer, Schönemann, Dübels 等ノ提唱セル Anginose 說、即チ Anginaハ扁桃腺以外ノ他ノ部分ヨリ細菌侵入シテ起セル全身敗血症ノ部分的症狀ナリト云フ說ニ對シ、多數ノ Anginaガ流行性ニ發生セル場合、若シ其中1名タリトモ猩紅熱患者ガ出デタル場合ニハ他ノ Anginaハ總テ非定型的猩紅熱ナリトサヘ云フ人アリ。果シテ然ラバ之等 Anginaニ於テ多數ニ見出サル、溶血性連鎖狀球菌ハ猩紅熱ト何等カノ關係アルガ如キモ、僅カ1名ノ猩紅熱患者ノ發生セル故ヲ以テ他ノ何等症狀ナキ單純ナル Angina lacunarisヲ總テ非定型的猩紅熱ナリト斷言スルハ些カ早計ニ失スベシ。從ツテ之等 Anginaノ扁桃腺中ニ見出サル、溶血性連鎖狀

球菌ヲ直チニ猩紅熱ト特殊ノ關係アリト爲スニハ尙ホ考慮ヲ要ス可ク、且ツ又、猩紅熱「アンギーナ」ニ非ザル單純ナル Angina lacunarisニ於テ更ニ健康扁桃腺ニ於テサヘ多數ニ認メラル、溶血性連鎖狀球菌ハ假令猩紅熱扁桃腺ヨリ殆ンド100%ニ認メラルトモ決シテ猩紅熱特有ノモノニ非ズ。

以上種々述ベタルモ要スルニ Scharlachvirusノ本態ニ關シテハ現在尙ホ不明ナリ。然レ共、猩紅熱併發「デフテリア」ノ豫後ガ單獨ニ發生セル「デフテリア」ノ豫後ニ比シ遙カニ不良ナルハ動カス可カラザル事實ニシテ其原因ヲ孰レカニ求メントスルニ矢張り Scharlachvirusト「デフテリア」菌トノ關係ニ求ムルヨリ他ナシ。斯カル考察ハ Scharlachvirusノ本態ノ不明ナル今日、單ナル想像ニ過ギザルモ猩紅熱病原菌ノ明カニサレタル曉ニハ甚ダ興味アル問題ヲ提供スルニ至ルベシ。

第 四 章

結 論

1. 健康扁桃腺内ニ生存セル「デフテリア」菌ハ猩紅熱ニヨリ「デフテリア」症狀ヲ發スルモノ、如シ。

2. 猩紅熱ノ死因トシテ「デフテリア」併發ハ重大ナル意義ヲ有ス。

3. 猩紅熱ニ併發セル「デフテリア」ハ單獨ニ發生セル「デフテリア」ニ比シ豫後甚ダ不良ナリ。

4. 其原因ニ關シテハ、Scharlachvirusト「デフテリア」菌トノ間ニ何等カノ關係アルガ如キモ Scharlachvirusノ本態不明ナル今日、其斷言ヲ憚ル。

主 要 文 献

- 1) **Balginski u. Sommerfeld:** Berl. kl. Wschr. Bd. 34, 1900. 2) **Döbeli:** Die Anginose, 1921. 3) **遠藤:** 傳染會誌. 第1卷, 第8號. 4) **Fein:** Die Anginose, 1921. 5) **埴:** 醫中央誌. 第274號, 大正6, 7年. 6) **弘中:** 慶應醫學. 第8卷, 第3號. 7) **弘中:** 日耳鼻全書. 第6卷ノ1. 8) **Johannes Schubel:** Arch. f. O-usw. Heilk. Bd. 124, H. 4, 1937. 9) **久保:** グレンツ 第1年, 第2號, 昭和2年. 10) **Lexer:** Arch. f. kl. Chirurg. Bd. 54, 1897. 11) **紋谷:** 慶應醫學. 第7卷, 昭和2年. 12) **村山:** 實驗醫報. 第24年, 第277號. 13) **村山:** 治療處方. 第11卷, 昭和5年. 14) **Schönemann:** Arch. f. Laryng. Rhinolog. Bd. 22, 1909. 15) **Stevens a. Dochez:** J. of exp. med. Vol. 40, 1924. 16) **富田:** 愛知醫會誌. 第30卷. 17) **山本:** 境域疾患. 昭和6年.

(原稿到着＝昭和13・3・3)